



県病医療ニュース

〒870-8511 大分市豊饒二丁目8番1号 TEL097-546-7111(代表) 内線7712:県病ニュース係



※当ニュースへのご意見・ご感想は県病ウェブサイトをご利用ください。

大分県立病院ウェブサイトはこちら

輸血部

自己血輸血について

手術には出血のリスクが伴いますが、必要に応じて輸血を実施することで、安全な手術を行うことの一助となっています。



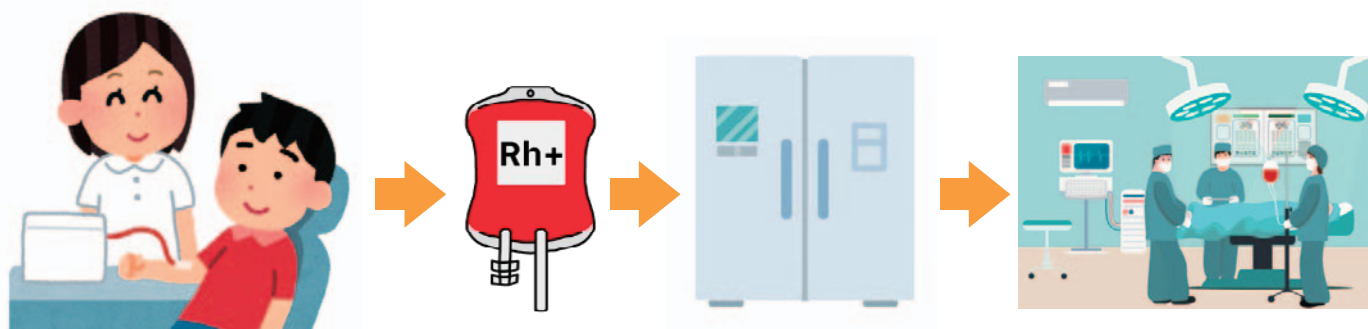
手術中の輸血には同種血輸血と自己血輸血があります。同種血輸血とは献血者の血液から作られた血液製剤を輸血する方法のことをいい、自己血輸血とは自分の血液を主に手術前に保存し、手術時に輸血する方法となります。

自己血輸血は自分自身の血液を輸血するため、同種血輸血と比較して輸血副反応を起こす可能性が低くなり、安全性がより高まります。

自己血輸血の方法には、貯血式、希釈式、回収式の三種類があり、一般的に自己血輸血といえば貯血式を指しており、当院においても心臓血管外科、整形外科などの待機的手術で用いられています。

貯血式は、手術日までに患者さん自身の血液を計画的に採血し、輸血部内の専用保冷庫に保存し、手術時に輸血を実施する方法です。

自己血輸血の適応には一定の条件(貯血期間、貧血が無いなど)があり、患者さん一人一人の状態も異なりますので、全ての方に適応するとは限りません。



(輸血部 部長 宮崎 泰彦)



※掲載内容の詳細は各科外来・各病棟でお尋ねください。

(裏面をご覧ください)

根治を目指した手術や放射線治療が困難な、いわゆる進行期でみつかった肺がんに対する治療の主役は薬物治療になります。肺がんの薬物治療に使う薬剤は、従来の抗がん剤、分子標的薬、免疫療法に大きく分けられます。

従来の抗がん剤は、主に細胞の分裂を阻害することでがん細胞の増殖を抑える治療法です。歴史ある治療法ですが、正常な細胞へのダメージもある程度避けられないという副作用があります。

分子標的薬はがん細胞がもつ特定の遺伝子異常やたんぱくに狙いを定めて、その働きを阻害することでがんの増殖を防ぐ薬剤です。正常な細胞への影響が比較的少ないのですが、薬剤性肺炎など重篤な副作用を認めることがあり、注意が必要です。またがん細胞に特定の遺伝子異常が認められた患者さんのみが、この治療の対象となります。

免疫療法はリンパ球と呼ばれる、いわゆる体内の異物を排除するパトカーのような細胞を活性化させ、がんを攻撃させる薬剤です。薬剤が直接がんを攻撃するのではなく、もともと人間が持っている免疫の仕組みを利用しますが、免疫の力が高まることで本来なら攻撃しなくてもよい正常な細胞にダメージを加えてしまい、副作用が出ることがあります。

肺がんと診断された組織を用いて遺伝子検査などの追加検査をおこなうことで、どの薬剤が患者さんに最も適しているかを見つけていきます。

肺がんに限ったことではありませんが、昨今のがん薬物治療の進歩は目覚ましく、毎年のように新しい治療薬が使用可能となっています。ただし、それぞれの薬剤には特徴的な副作用があり、がんの種類によっては使用できなかったり、患者さんの持病と相性が悪く使用が困難であったりします。詳しくは担当医と御相談ください。

私たちは、それぞれの患者さんに最も適した治療を提供し、また副作用ができるだけ軽くすむように努めてまいりますので、一緒に頑張っていきましょう。

(呼吸器腫瘍内科 医師 駄阿 徳太郎)

各種療法のイメージ図



看護師ほか医療スタッフの
臨時職員を募集しています。
詳しくはこちら